

What is this?

技術研究部 藤原しのぶ

はじめに

本報は、1992年7月15日の21:24～21:31に八丈島の南方（北緯32度47分、東経140度37分）（図1）において、水深100mからの改良マルチネットの鉛直曳きにより採集された、全長16mmの極めて特異な形態を持った仔魚についての報告をおこなう。

なお、この標本は海洋水産資源開発センター（JAMARC）により、平成2年から平成6年まで行われた沖合有用魚種相調査で採集されたものである。

外部形態

この仔魚の頭腹部を腹部から見た性状を図2に示した。最も目を引く特徴は、頭部の大きさもさることながら、その頭部真横にやや突出した眼と、著しく伸長した腹鰭であろう。頭部は著しく縦扁し、ヘラ状の下顎に覆い被さるように上顎が形成されている。口裂は著しく大きく、上顎後端は眼球のほぼ真横にまで達する。既に

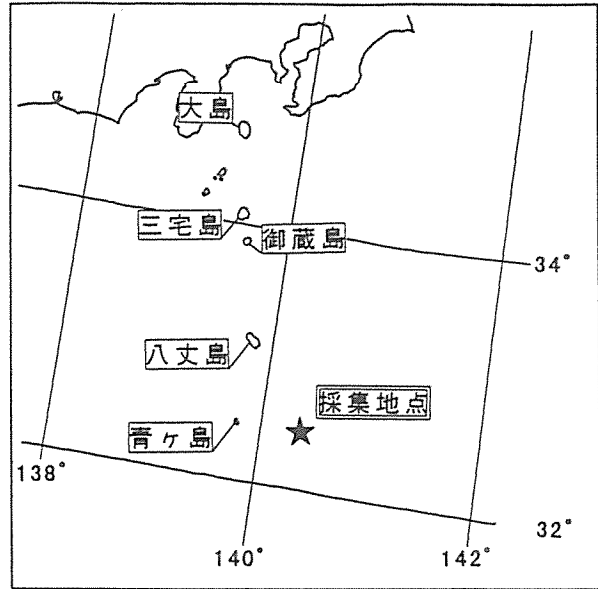


図1 採集位置

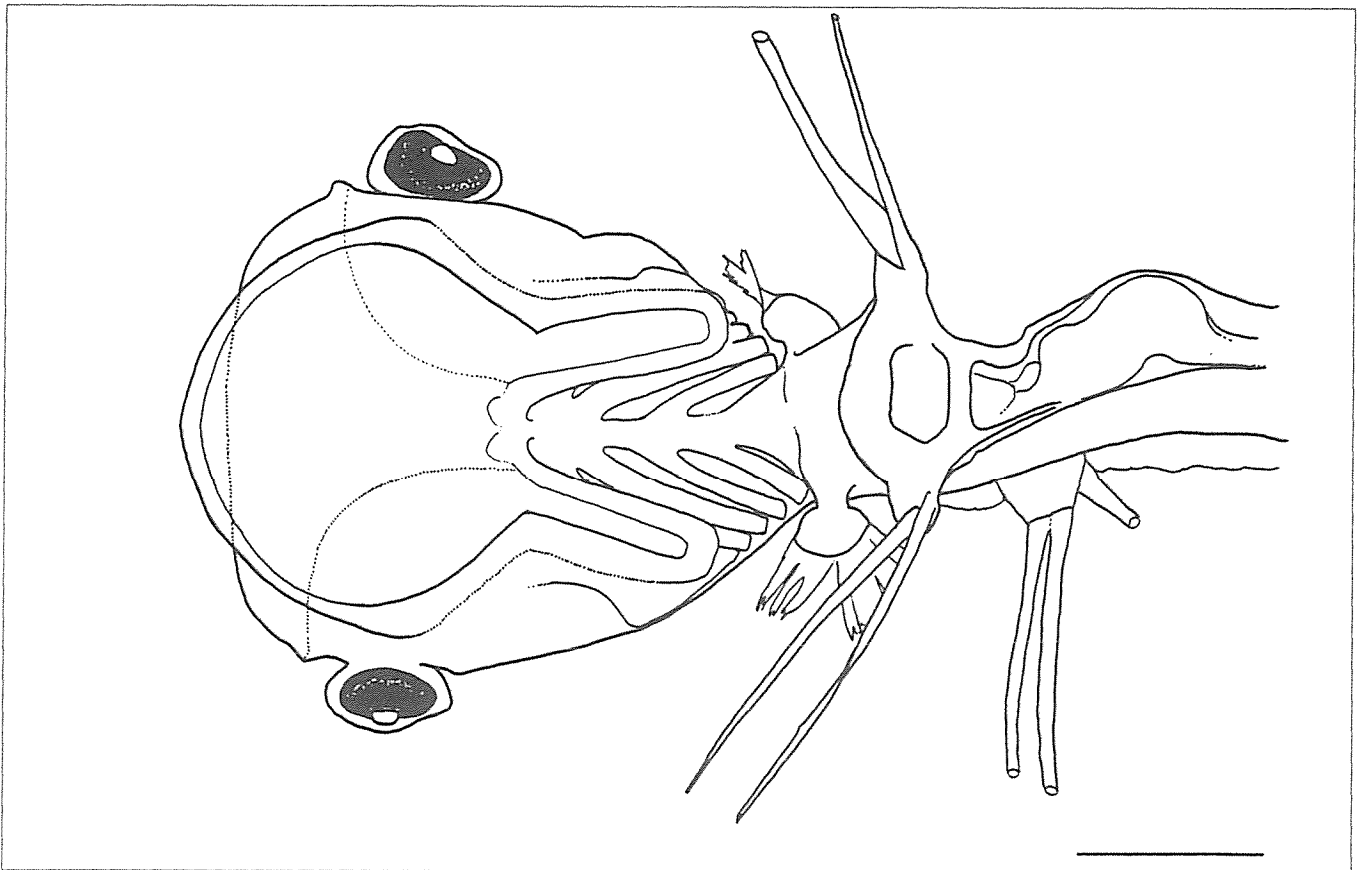


図2 腹面よりみたところ（スケールは1mm）

鰓耙が形成されつつあり、鰓弓の発達も顕著である。

鰭については、胸鰭が膜鰭状であるのに対し、腹鰭は既に左右それぞれが2本の軟条として分化している。その両腹鰭をつなぐ腹鰭担鰭骨も形成され始めており明瞭に識別することができる。

図3には、本個体を側面と背面から観察して図示した。頭部は縦扁しているが、長く伸びた尾部は側扁している。背鰭と腹鰭が著しく伸長するのが特徴的である。

背鰭の全長は先端が折れているため不明であるが、少なくとも頭長の1.5倍の長さは有し、腹鰭長は頭長の2倍に及ぶ。背鰭には既に2本の軟条が伸長し、その後方にはさらに2本の短い鰭条が形成されつつある。なお、腹鰭には各々の鰭中央あたりに”節”が形成されているが、

その構造については不明であった。尾部には臀鰭の基底がかすかに形成されており、ほぼ尾部末端まで連続するようであるが、尾鰭は認められない。

体側のほとんどが透明であり、腹腔の背面に数カ所の黒色素胞が認められる以外は、体側に色素胞は認められない。なお、本個体では頭部が著しく縦扁しているため、視神経なども実体顕微鏡下で観察することが可能である。

筋節は極めて多く、約132が数えられる。

これらの特徴を有する仔魚の報告は今までにないが、沖山（私信）の見解により、本種はシャフリ科の一種であることが判明した。

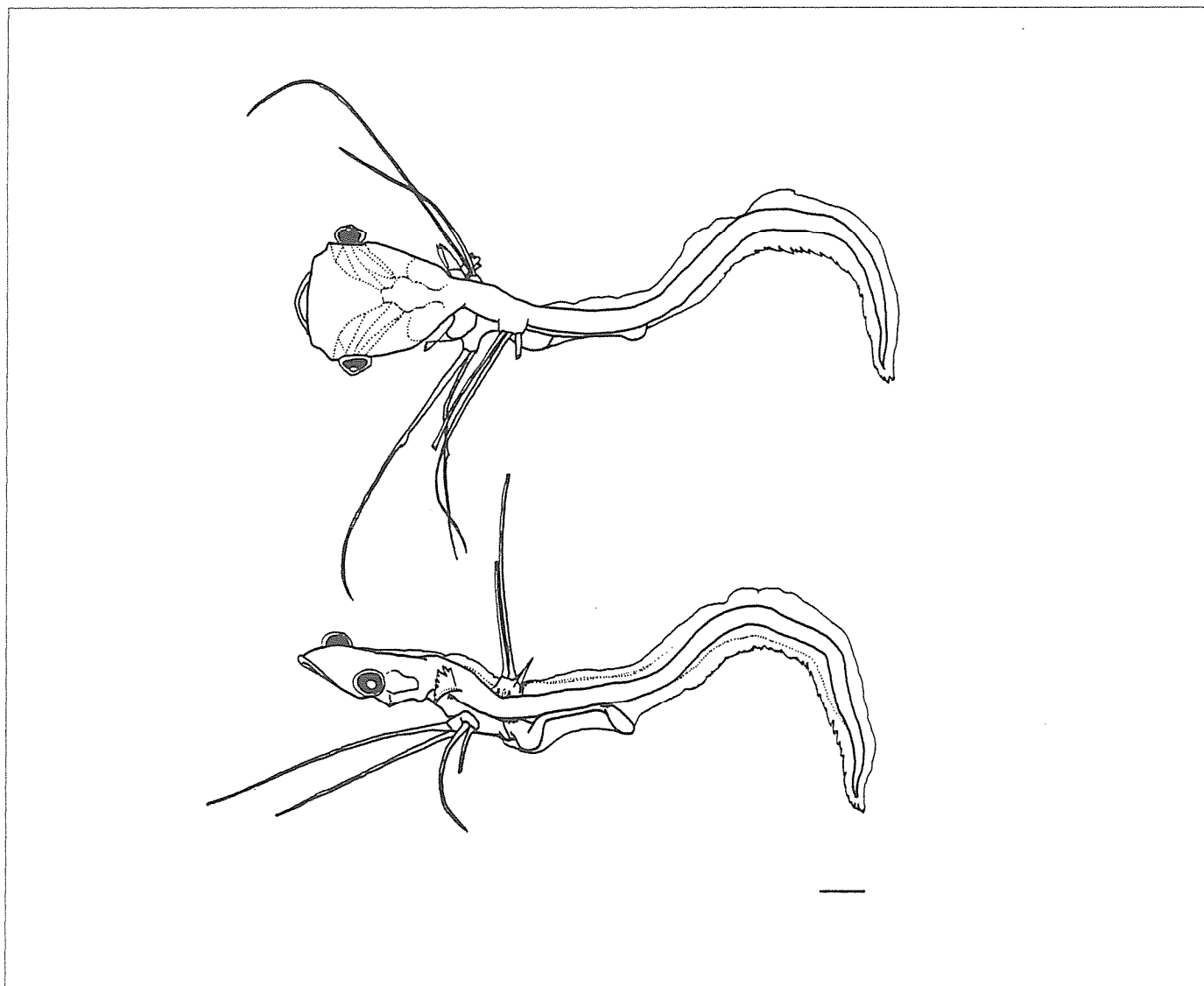


図3 体側全体（上：背面，下：側面，スケールは1mm）

シャブフリ科とは？

シャブフリ科といわれて、すぐにその形態を思い浮かべられる人は少ないであろう。本科は成魚であっても知見が少なく、幼期に至ってはほとんど皆無であるといえる。

現在のところ、シャブフリ科には少なくとも日本近海に次の 2 属 5 種が知られている（藍澤 1993）。

分類学的位置

クダラオ目	Cetomimiformes
シャブフリ科	Ateleopodidae
シャブフリ属	<i>Ateleopus</i>
シャブフリ	<i>A. japonicus</i> Bleeker
ムラサキシャブフリ	<i>A. purpureus</i> Tanaka
タベシャブフリ	<i>A. tanabensis</i> Tanaka
シロダチシャブフリ	<i>A. sp.</i>
オシャブフリ属	<i>Ijimaia</i>
オシャブフリ	<i>I. dofleini</i> Sauter

これらのいずれの種にも共通する外部の特徴は（図 4）、尾部が細長く伸長し、わずかに側扁することである。背鰭基底は短く体の比較的前方に位置するが、臀鰭基底は長く尾鰭へと連続する。また、腹鰭は糸状である。それぞれの鰭の数は、腹鰭 2～3 本、背鰭 9～12 本、臀鰭と尾鰭を合わせると 100 本前後である。

シャブフリ *A. japonicus* は、日本近海では南日本沿岸の陸棚斜面域に分布し、その体は柔軟で、吻はゼラチン状物質で占められるが、形態的変異が著しいとされる。

生態的には、ほとんどの種が水深 100m 前後から 600m までの砂泥底に生息する深海魚という程度にしか知られておらず、また、食用にもされていないことから、既存の研究は極めて少ない。

さらに、シャブフリ属では未同定種が数種報告されているなど、現在でも分類学的に混乱している分類群といえる。

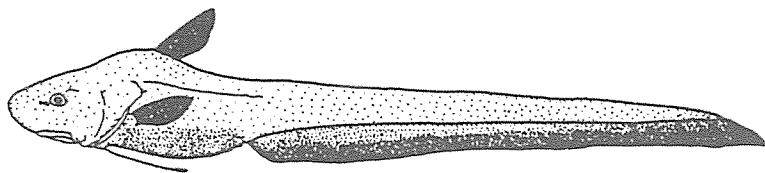
おわりに

今回は特異な形態を持った仔魚を、その科名とともに紹介することができたが、親の計数形質を発現している稚魚の存在がなければ全く帰属不明となっていたであろう。査定をしていただいた東京大学海洋研究所資源生物部門の沖山宗雄博士に深く感謝する次第である。

現在、当社のような環境調査会社で、業務上お目にかかることのできる稚仔魚は、ほとんどが日本沿岸の海域で出現する稚仔魚ばかりである。こういった海域に出現する魚種は、かなり限定されると言っても過言ではない。それでも、今までに見たことのない稚仔魚について（既にスケッチなどで見ている）、実物を見た時の感動はなかなか言葉では言い表せられない。しかし、これらの初めて見る稚仔魚の中には、どの本を見ても載っていないということが意外と多い。そして業務上、公開できない名無しの稚仔魚は、闇に葬り去られるか、永久に放置されることになる。当たり前のことではあるが、得られた情報は公開しなければ、いつまで経ってもわからないものはわからないまま、ということになってしまう。採集された稚仔魚も無駄死にはないかと考えるものである。

参考文献

- 藍澤正宏,1993.シャブフリ科. Pages 32,463-464, 1289-1290 in 中坊徹次 編. 日本産魚類検索. 東海大学出版会
- 望月賢二,1984.シャブフリ科. Pages 113, pl.100 in 益田一 他編. 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会
- 沖山宗雄,1998.シャブフリ. Pages 203 in 能勢幸雄 他 編. 魚の辞典.



（日本産魚類検索より）

図 4 シャブフリ *Ateleopus japonicus* Bleeker （全長 1m）